

---

本 庄 市

---

# 金 屋 条 里 遺 跡

---

県道秩父児玉線建設事業関係  
埋蔵文化財（本庄市地内金屋条里遺跡）発掘調査報告

2 0 0 7

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 金屋采里遺跡遠景



2 金屋采里遺跡全景

## 序

埼玉県は「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念とし、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策の実施による「時間が読める道づくり」と、「豊かさ」と「ゆとり」を実感できるよう安心・安全でうおいのある道路空間を形成し、地域を元気にする「安心と活力の道づくり」を推進しています。

県道秩父児玉線建設事業は、このような基本方針に基づき、総合的な交通渋滞対策として市街地の混雑を緩和し、円滑で快適な交通を確保するため、環状道路の整備を進めるものであります。一般国道462号の交通渋滞緩和や秩父地域との広域的な交流や地域間の連携をより一層促進することが期待されています。

本庄市は、埼玉県の北部首都80キロメートル圏に位置し、関越自動車道や国道17号・254号・462号などの主要道が縦横に走り、東京と上信越方面を結ぶ交通の要衝となっています。また本庄市は、県内有数の大規模な原始・古代遺跡の分布地域で、旧石器時代から江戸時代に至るまで、多くの埋蔵文化財が知られている歴史の町でもあります。なかでも金屋条里遺跡のある児玉地区は、県内屈指の遺跡の宝庫で、遺跡近くにある雉岡城は、戦国時代に山上上杉氏によって築かれ、後に城下に営まれた家臣団を中心とする町屋は、旧児玉町の起源とされています。

金屋条里遺跡は、県道秩父児玉線建設用地内に所在し、その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県土木部道路建設課（当時）の委託を受け当事業団が実施しました。

調査の結果、溝跡や土坑、河川跡などが発見されました。これらの遺構からは、縄文土器や土師器、陶器などの土器類や製鉄に関係する溶解炉の炉壁が出土し、当地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、本庄県土整備事務所、本庄市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 福田陽充

## 例 言

- 1 本書は、本庄市児玉町金屋に所在する金屋条里遺跡（甲中ノ堰地区）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。  
金屋条里遺跡（甲中ノ堰地区）(KNYJR 甲中)  
埼玉県本庄市金屋 1306-1  
平成 15 年 7 月 30 日付け 教文第 2-114 号
- 3 発掘調査は、県道秩父児玉線（本庄市地内金屋条里遺跡）建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 発掘調査事業は、1-3 の組織により実施した。調査は、平成 15 年 7 月 22 日から平成 15 年 10 月 31 日まで実施し、岩瀬譲、永井いずみが担当し、高田賢治の補助を受けた。  
整理・報告書作成事業は平成 18 年 12 月 1 日から 12 月 28 日まで磯崎一が担当して実施し、平成 19 年 2 月 28 日までに埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 331 集として印刷・発行した。
- 5 遺跡の基準点測量および空中写真は、中央航業株式会社に委託した。
- 6 発掘調査時の写真撮影は岩瀬、永井、高田が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
- 7 出土品の整理・図版作成は磯崎が行い、赤熊浩一、岩瀬、新屋雅明の協力、山北美穂の補助を受けた。
- 8 本書の執筆は、1-1 は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、1-2・3 は岩瀬、IV は岩瀬、新屋、山北、他は磯崎が行った。
- 9 本書の編集は磯崎、岩瀬が行った。
- 10 本書に掲載した資料は、平成 19 年 4 月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 11 本書の作成にあたり下記の方々・機関から御教示・御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)  
旧児玉町教育委員会

# 凡例

1 本書におけるX・Yの数値は、日本測地系(旧測地系)による国家標準平面直角座標第IX系(原点:北緯36°00′00″、東経139°50′00″)に基づく座標値を示し、各挿図内における方位はすべて座標北を示している。

なお、遺跡内B-14杭の経度・緯度およびX・Yの数値は日本測地系から世界測地系に変換すると以下ようになる。

日本測地系(旧測地系)

北緯 36° 11′ 36″ 0277

東経 139° 07′ 37″ 4543

X = 21680.000 m

Y = -63510.000 m

世界測地系(新測地系)

北緯 36° 11′ 47″ 4176

東経 139° 07′ 37″ 9339

X = 22035.4525 m

Y = -63802.8289 m

2 遺跡におけるグリッドは、前記国家標準平面直角座標に基づいて設置し、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。

3 グリッドの名称は、北西杭を基準とし、南北方向は北から南へA、B、C……、東西方向は西から東へ1、2、3……とした。(例 C-3グリッド)

4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

S D 溝跡

S K 土坑

S X 性格不明遺構

5 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。  
遺構図

溝跡 1/80 1/120

土坑・河川跡 1/60

性格不明遺構 1/80

遺物実測図

土器・陶磁器 1/4

石器・竈壁 1/3

その他のものは個別にスケール・縮尺率を表記した。

6 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。

7 遺構断面図等に表記した水準数値は、海拔標高を示す。

8 挿図中の網掛け部分の表示は以下のことを示す。  
竈壁の溶解面 黒30%

9 遺物観察表については次のとおりである。

・口径・器高・底径はcm、重さはgを単位とする。

・( ) 内の数値は復元推定値を示す。

・胎土は肉眼で観察できるものを示した。

A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石

E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子 H : 赤色

粒子 I : 白色粒子 J : 白色針状物質

K : 黒色粒子 L : その他

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は、破片の場合、図示した器形の部分に対する割合を示した。

10 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図、旧児玉町都市計画図1/2,500を使用した。

11 土層および土器類の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に従った。

# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	1. 溝跡	13
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 土坑	13
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 性格不明遺構	17
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	4. 河川跡	18
II 遺跡の立地と環境	3	5. グリッド出土遺物	20
III 遺跡の概要	9	V 調査のまとめ	23
IV 遺構と遺物	13	写真図版	

## 挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	3	第10図	第3号溝跡	16
第2図	周辺の遺跡	4	第11図	土坑	17
第3図	金屋条里周辺の遺跡	6	第12図	第1号性格不明遺構	18
第4図	調査区全体図	9	第13図	河川跡断面	19
第5図	遺跡周辺の地形図	10	第14図	第1号性格不明遺構出土遺物(1)	20
第6図	東区全体図	11	第15図	第1号性格不明遺構出土遺物(2)	21
第7図	西区全体図	12	第16図	河川跡出土遺物	21
第8図	第1号溝跡	14	第17図	グリッド出土遺物	22
第9図	第2号溝跡	15			

## 表 目 次

第1表	第1号性格不明遺構出土遺物観察表	22
-----	------------------	----

## 図 版 目 次

巻頭図版		3	第3号溝跡
	1 金屋条里遺跡遠景	4	第1号土坑
	2 金屋条里遺跡全景	5	第2号土坑
図版1	1 金屋条里遺跡遠景	6	第3号土坑確認状況
	2 金屋条里遺跡全景	7	第3号土坑桶出土状況
図版2	1 東区全景	8	第1号性格不明遺構
	2 西区全景	図版4	1 第1号性格不明遺構出土遺物
図版3	1 第1号溝跡	2	河川跡出土遺物
	2 第2号溝跡		

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5カ年計画2」における「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標に基づき、県民の暮らしや産業・文化などあらゆる活動の基盤であり、県土の骨格となる道路や鉄道など県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道秩父児玉線の道路改築工事に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成14年6月14日付け本土第414号で、県本庄土木事務所長（当時）から照会があった。

県文化財保護課（当時）では、平成14年10月28日に試掘による確認調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成14年11月7日付け教文第1083号で次の内容の回答を行った。

### 1 埋蔵文化財の所在

名称：児玉町№120遺跡（№54-120）

種別：条里跡

時代：奈良・平安

所在地：児玉町大字八幡山内

### 2 法手続について

事業予定地には上記の埋蔵文化財が所在しま

すので、工事着手に先立ち文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出してください。

### 3 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、やむを得ず工事を実施する場合は記録保存のための発掘調査を実施してください。（補足を目的として、平成15年7月14日にも確認調査を実施した。）

本庄土木事務所と文化財保護課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることになった。

また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託することになった。

発掘調査の実施にあたり、児玉町№120遺跡は、児玉町（当時）教育委員会との協議により、「金屋条里遺跡」と命名された。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届（文化財保護法第57条1項：当時）に対する県教育委員会教育長からの指示は、平成15年7月30日付け教文第2-114号で通知した。（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）



## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

金屋条里遺跡甲中ノ塚地区の発掘調査は、平成15年7月22日から平成15年10月31日まで実施した。調査は当初、面積1,800㎡、9月30日までの予定で着手した。9月上旬、隣接する調査予定の未買収地が着したことで面積が1,400㎡増加し、1ヶ月の期間延長となった。最終的な調査面積は3,200㎡である。

7月22日より事務手続き、事務所設置を行い、併行して重機による表土除去作業を開始した。8月11日から補助員による遺構確認作業に着手し、順次遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、平安時代の溝跡2条、中・近世の溝跡1条、土坑4基、性格不明遺構1基のほか、河川跡などが検出された。

遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、10月16日に空中写真撮影を実施した。

遺構の調査終了後、重機による埋め戻し、事務所撤去、事務手続きを行い調査は終了した。

### (2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成作業は平成18年12月1日から平成19年2月28日まで実施した。

12月当初から、出土遺物の水洗・註記を行い、続いて遺物の接合・復元作業を行った。併行して全体図・遺構図面は、図面修正を経て第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだものをコンピューターでデジタルトレースを行い、遺構番号・土層注記の挿入等の編集を進めた。遺物は復元が終了したのから実測作業に入り、中旬から順次トレース・採拓を開始した。遺物図も全体図・遺構図同様にスキャナーで取り込み、デジタルデータを作成した。

中旬からは遺物の写真撮影、図面・写真の割付、原稿執筆を進め報告書の編集を開始した。12月末に印刷会社を決定し入稿、校正を経て、平成19年2月に報告書を刊行した。

入稿後に本報告書で扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

## 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

### 平成15年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹
<b>管理部</b>	
管理部副部長	村 田 健 二
主 席	田 中 由 夫

### 平成18年度（整理・報告書刊行）

理 事 長	福 田 陽 充
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
<b>総務部</b>	
総務部副部長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	高 橋 義 和

### 調査部

調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主 席 調 査 員（調査第二担当）	剣 持 和 夫
統 括 調 査 員	岩 瀬 讓
調 査 員	永 井 い ず み

### 調査部

調 査 部 長	今 泉 泰 之
調 査 部 副 部 長 兼 資 料 活 用 部 副 部 長	小 野 美 代 子
主 幹 兼 整 理 第 一 課 長	磯 崎 一

## II 遺跡の立地と環境

金屋条里遺跡は本庄市児玉町大字金屋に所在し、JR八高線児玉駅の西約3kmに位置している。

本庄市児玉町は埼玉県の北西部にあたり、地形的には八王子-高崎構造線によって南西部の山地部分と北東部の平地部に明瞭に分けられる。

山地部は不動山、陣身山など500m級の山々がそびえ、上武山地に連なっている。平地部には丘陵、台地、低地の三地形があり、上武山地から続く児玉丘陵は、山麓部分から平野部に北東方向へ半島状に張り出している。さらに北東には標高139mの生野山、112mの浅見山などの残丘状の丘陵があり、美里町、旧岡部町方面には諏訪山・山崎山丘陵なども広がっている。

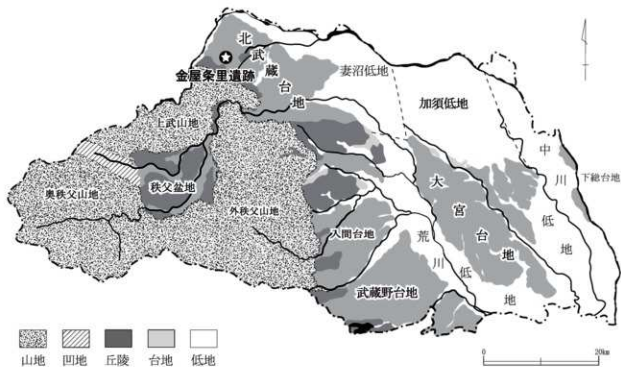
また、児玉丘陵の北東には神流川扇状地である本庄台地が広がる。この台地上には市街地が広がり、本庄市、上里町の市街地に続いている。

代表的な水系は小山川と女掘川で、小山川は、太駄地区の男岳・女岳に源を発し、南西～北東方向に

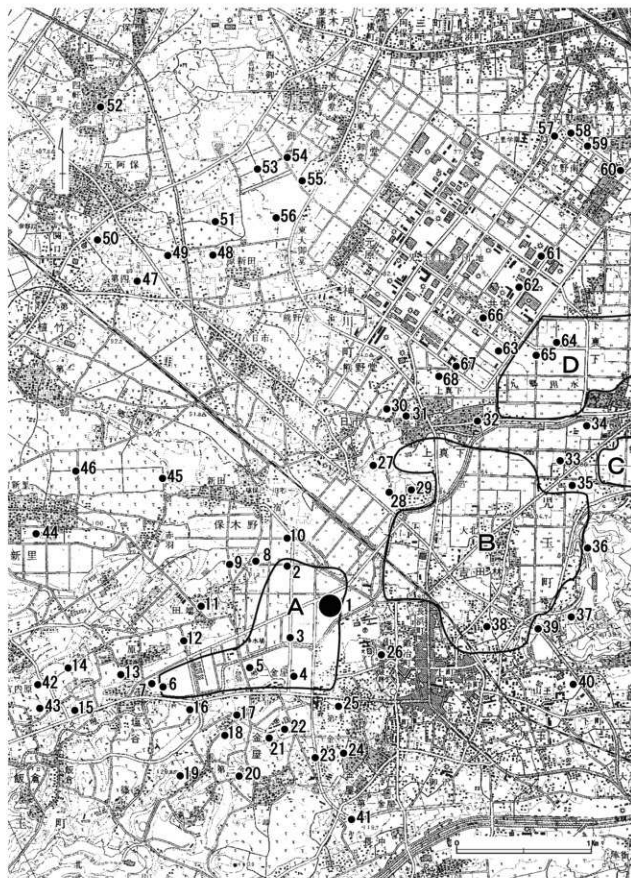
流路を取っている。女掘川は、小山川と平行するように北東方向に流れている。本庄台地の南部から東部は、この両河川が流れ、台地低位面との標高差はあまりなく、低地的な景観となり、帯状に形成された沖積低地上には、微高地、自然堤防が点在する(児玉町1993)。

本遺跡の立地する女掘川低地は、かつて宮内地区から発した赤根川と神川町金鑽山を源とする金鑽川が合流して形成した低地で、この両河川は古くから用排水路として大きな役割を果たしてきた。

金屋条里遺跡は、現代まで古代条里型地割が機能していた地域で、旧児玉町の圃場整備事業に伴い昭和52年～昭和54年度の3年間に発掘調査が行われ、報告書が刊行された(鈴木1980)。金屋遺跡群としてミカド遺跡(6)、ミカド西遺跡(7)、向遺跡(9)、円良岡遺跡(2)、上一ノ堰遺跡(5)、一丁田遺跡(4)、十二天遺跡(8)、乙中ノ堰遺跡(3)等が調査された。



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡

今回調査の同遺跡甲中ノ塚地区は、児玉高校北東の女堀川北岸に位置し、遺跡の標高は90～91mを測り、調査区の西側から東側に向かって緩く傾斜している。

周辺部の開発に伴い田端中原遺跡(11)、塩谷原遺跡(13)、塩谷下大塚遺跡(16)、塩谷平氏ノ宮遺跡、金屋下別所遺跡、倉林後遺跡(21)、倉林東遺跡(23)、金屋西遺跡(24)、東鹿沼遺跡(10)等、金屋条里遺跡を取り囲むように多数の調査が行われている(第3図)。周辺丘陵部を含めると膨大な遺跡が確認でき、また調査も及んでおり、次第に各時代の様相が明らかになってきている。

旧石器時代の遺跡は、下原北遺跡(42)、下原南遺跡(43)、天田遺跡、倉林東遺跡がある。その他生野山丘陵北端の城の内遺跡、大久保山丘陵の本庄市有勝寺北裏遺跡、大久保山I遺跡などが知られている。

縄文時代の遺跡は、児玉丘陵を構成するすべての小支丘上で、少なからず確認されている。

草創期の遺跡は有勝寺北裏遺跡、長沖梅原遺跡、秋山宿田保遺跡等がある。

早期の遺跡は、城の内遺跡、葦池遺跡、秋山南飯盛遺跡があり、後半では枇杷橋遺跡(17)、長沖古墳群内、秋山中山遺跡等が知られている。

前期の遺跡は、最も遺跡数が多く丘陵部から上武山地縁辺部にかけて分布している。

黒浜式から諸磯b式期には多くの遺跡がある。大久保山I遺跡、長沖久保遺跡(41)、長沖梅原遺跡、塩谷下大塚遺跡、横尾後遺跡、宇留井山遺跡、神明前遺跡などである。該期の堅穴住居跡は、塩谷下大塚遺跡、ウリ山遺跡、真鏡寺後遺跡A地点(14)、上の原遺跡、天田遺跡で数軒規模の堅穴住居跡が調

査された。金屋下別所遺跡B地点(宍河内2006)では前期と中期の遺物が、上の原遺跡でも前期と中期の住居跡が発見された。低地の遺跡は少ないことが指摘されている。

概して前期の遺跡は、丘陵部では小規模な遺跡が近接して分布し、遺跡間の相互の距離は比較的狭く、台地や低地部では極めて稀薄な分布となっており、対照的な占地形態をとることが指摘されている(鈴木1985)。

中期は、遺跡数が最も多く、中葉以降特に顕著である。本遺跡では河川跡から加曾利EⅢ式深塚が出土した。本庄台地上には大規模な環状集落の古井戸遺跡(62)、将監塚遺跡(61)や、新宮遺跡(67)が現れる。これらは加曾利EⅢ式頃から分解が始まり、周辺の神田遺跡、平塚遺跡(64)等の中小規模集落に移ると考えられている(鈴木1997b)。

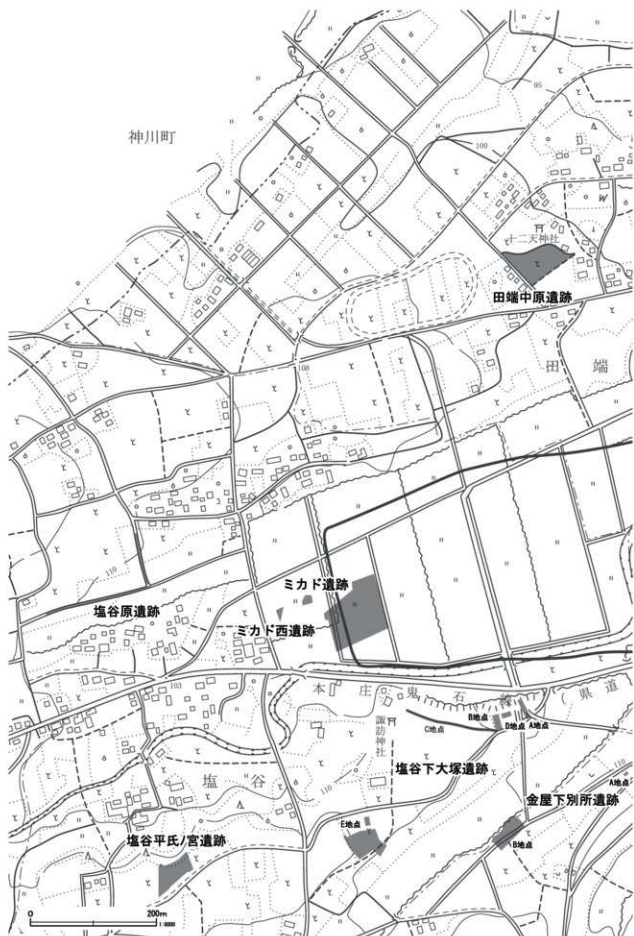
丘陵部では長沖梅原遺跡、倉林東遺跡、塩谷平氏ノ宮遺跡でも集落の存在が確認され、平氏ノ宮遺跡(宍河内2006)では堅穴住居跡3軒、土坑29基、土器埋設遺構2基が検出されている。上武山地でも橋ノ入遺跡(鈴木1986)で調査が行われているが、中小規模の遺跡が多いことが判っている。

後・晩期は遺跡の分布密度はきわめて低い。藤塚遺跡、児玉清水遺跡、女池遺跡(38)、阿知越遺跡、塚原遺跡、真鏡寺後遺跡が知られている。

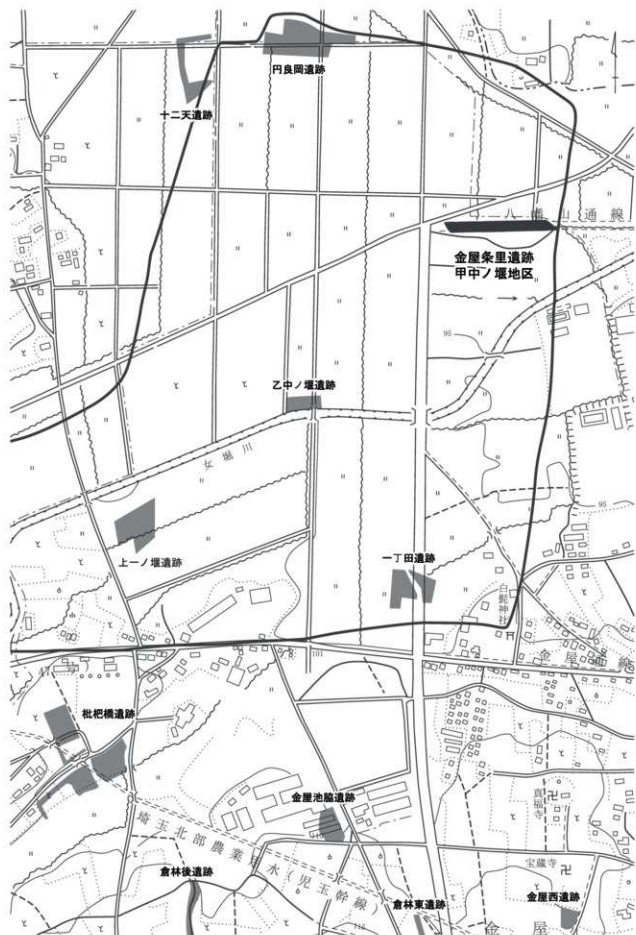
後・晩期の遺跡は河川との強い繋がりのあることが指摘され、縄文時代終末から弥生時代前期への連続性が見られている(鈴木1997b)。

弥生時代の遺跡は、明瞭な集落が形成されるのは中期後半からである。神川町前組羽根倉遺跡では中期前半の再葬墓が調査され、女堀川流域では本庄市今井川越田遺跡で中期中葉の壺形土器が出土してい

1. 金屋条里甲中ノ塚 2. 円良岡 3. 乙中ノ塚 4. 一丁田 5. 上ノ塚 6. ミカド 7. ミカド西 8. 十二天 9. 向 10. 東鹿沼 11. 田端中原  
12. 横尾後 13. 塩谷原 14. 真鏡寺後 15. 真鏡寺前跡 16. 塩谷下大塚 17. 枇杷橋 18. 観音塚 19. 別所城跡(観音山) 20. 金仏塚 21. 倉林後  
22. 金屋地跡 23. 倉林東 24. 金屋西 25. 金屋北原 26. 畑岡城跡 27. 八荒神南 28. 反り町 29. 金佐奈 30. 真下境西 31. 真下境東 32. 上真下東  
33. 辻堂 34. 観川坊田 35. 南街道 36. 新山 37. 阿知越 38. 女池 39. 御林下 40. 清水上 41. 長沖久保 42. 下原北 43. 下原南 44. 両部原敷跡  
45. 北木野堤 46. 中北原 47. 北原 48. 金塚 49. 久保宿 50. 観音院南 51. 中原 52. 愛染 53. 抽免 54. 大御堂女塚 55. 大御堂榎下 56. 鳥居原  
・榎下 57. 立野南 58. 八幡大神南 59. 熊野大神南 60. 今井遺跡群 61. 将監塚 62. 古井戸 63. 塚島 64. 平塚 65. 中下田 66. 南長和 67. 新宮  
68. 辻ノ内 A. 金屋条里 B. 児玉条里 C. 児玉(観川)条里 D. 児玉条里



第3図 金屋条里周辺の遺跡



る(岩田1998)。

後期に入ると遺跡数は増加するが、丘陵部を中心に小規模遺跡が点在し、また吉ヶ谷式系、柳描文系、二軒屋式系土器が混在するという特徴がある。生野山遺跡、長沖久保遺跡、飯玉東遺跡、真鏡寺後遺跡、後張遺跡、雷電下遺跡、念仏塚遺跡(20)、塩谷下大塚遺跡、飯倉古墳群、下原北遺跡、西浦遺跡、根田遺跡等が知られている。柳描文系土器を出土する遺跡は下原北遺跡、真鏡寺後遺跡、塩谷平氏ノ宮遺跡等があり、それぞれ数軒の竪穴住居跡が検出された。塩谷平氏ノ宮遺跡では、有孔磨製石礫も出土した(恋河内2006)。その他塩谷下大塚遺跡で方形周溝墓が調査されている。

古墳時代前期になるとさらに遺跡数が増加し、女堀川中流域では後張遺跡、川越田遺跡(富田他1985)、雷電下遺跡、日延遺跡、浅見境北遺跡があり、丘陵付近では前組羽根倉遺跡、ミカド遺跡、ミカド西遺跡、長沖久保遺跡等がある。ミカド遺跡では五領期の竪穴住居跡1軒、ミカド西遺跡では五領期の竪穴住居跡3軒が調査され、一丁田遺跡では河川跡から五領期・鬼高期の破片が出土している。また乙中ノ堰遺跡では5世紀前半と考えられる水田耕作土が確認されている。水田の形態は溝状遺構と同じゆるやかに屈曲したもので、微高地上の集落に隣接する地点に局部的に営まれたものと考えられている。

中期の遺跡は、本庄市では西富田遺跡群を形成し、辻堂遺跡(33)、南海道遺跡(35)等や、直線的な水路が検出された高縄田遺跡が調査されている。本遺跡周辺では、真鏡寺後遺跡、枇杷橋遺跡、倉林後遺跡などがある。

後期はミカド遺跡があり、多量の古式須恵器を出土した。後半になると真鏡寺後遺跡、下原北遺跡、下原南遺跡、倉林後遺跡、念仏塚遺跡が丘陵上、宮田遺跡、女池遺跡、辻堂遺跡、南街道遺跡、金佐奈遺跡(29)、反り町遺跡(28)、八荒神南遺跡(27)、上真下東遺跡(32)等が低地とその周辺部に展開するようになる。

残丘上には金鑽神社古墳、生野山銚子塚古墳等60

m規模の墳丘を持つ古墳が築造される。古墳群は、丘陵部とその周辺に、飯倉古墳群、長沖古墳群、生野山古墳群、下町古墳群、塚本山古墳群等が分布する。

7世紀中葉前後以後、大規模集落が台地上に形成される。将監塚遺跡、古井戸遺跡、皂樹原・楡下遺跡(56)、大師堂楡下遺跡(55)、中原遺跡(51)などで、これらに先行して立野南遺跡(57)、熊野太神南遺跡(59)、八幡太神南遺跡(58)、今井遺跡群(60)、辻ノ内遺跡(68)・真下境東遺跡(31)等が形成されている。また低地部の大規模な灌概用水の開鑿が行われた時期で、真下大溝(鈴木1990)、女堀大溝(篠崎1999)があり、金屋条里遺跡付近では、律令期の田端大溝と金屋大溝が確認され、“大開鑿の時代”とされている(鈴木1997b)。

条里遺跡については、本遺跡をはじめ児玉条里遺跡、真下境東遺跡、堀向遺跡、今井条里遺跡、四方田条里遺跡等が調査され、今井条里遺跡では、古墳前期を含めて水田跡や水路跡が検出された。本遺跡周辺部では、円良岡遺跡で水田跡と溝状遺構、一丁田遺跡で大溝1条、乙中ノ堰遺跡で水田耕作土層が、十二天遺跡で大溝1条、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、東鹿沼遺跡で平安時代の竪穴住居跡、道路状遺構等が調査され、その他金屋下別所遺跡B地点で溝状遺構1条、金屋西遺跡B地点で平安時代の掘立柱建物跡1棟が検出されている。該期の水田遺構や溝跡、大溝、集落等については、歴史的意義をも含めて次第に明らかになりつつある(鈴木1996)。

中世になると、児玉党塩谷氏の居館とされる真鏡寺館跡(15)や、16～17世紀にかけての城跡である雉岡城跡(26)が知られている。ミカド遺跡では、集石遺構、掘立柱建物跡、溝跡等、一丁田遺跡では土坑、建物遺構、上一ノ堰遺跡では民家の母屋と推定される建物遺構、近世のタタラ跡等、乙中ノ堰遺跡では近世以降の溝状遺構が、十二天遺跡では中世の建物跡、土坑群、井戸跡、溝跡、近世の溝跡が検出され、塩谷下大塚遺跡E地点で堀跡、金屋西遺跡A地点で掘立柱建物跡1棟、土坑、溝跡などが調査されている。

### III 遺跡の概要

金屋条里遺跡は本市市児玉町金屋に所在する。

児玉丘陵の北東に広がる本庄台地の南東部は、女堀川の開析により帯状に沖積低地が形成され、微高地、自然堤防が点在しているが、遺跡はこの低地帯に広がっている。調査地点は、児玉高校北東の女堀川北岸に位置する甲中ノ堰地区である。

調査範囲は東西約180m、南北約18mの略長方形を呈し、面積は3,200㎡である。調査区は、中央用水路を境に西側を西区、東側を東区とした。調査区の標高は調査区西端部が91.0m、東端部で90.0mを測り、全体に西から東に傾斜している。

調査の結果検出された遺構は、溝跡3条、土坑4基、性格不明遺構1基で、その他河川跡・埋没谷が検出された。

西区では、第1、2号溝跡と第1、2、4号土坑が検出された。両溝跡は、埋土上層で浅間山B軽石が認められ、平安時代後半には既に埋没していたと考えられる。河川跡は、東西両区にまたがって検出された。幅約40～80mの自然流路である。南端でトレンチ調査を行ったが、内部の湧水が激しく流路全体を検出するには至らなかった。埋土中から縄文時代中期の深鉢や土師器片等が出土した。

東区では、河川跡の東側に接する第3号溝跡、第3号土坑、第1号性格不明遺構が検出された。土坑は、桶状の木製品が出土し、木製品の下から陶器小片が出土しており、中世以降の所産と考えられる。性格不明の遺構中からは、底面中央部付近で縄文土器・須恵器・陶器・木製加工材・礫等がまとめて出土した。所属時期は中世以降と考えられる。

埋没谷は、トレンチによる調査を行ったが、河川跡同様湧水が顕著で、完掘はできなかった。遺物は出土していない。

出土遺物は、少量で縄文土器、打製石斧、土師器、須恵器、中・近世陶磁器、木製品等の他に溶解炉の炉壁が出土している。



第4図 調査区全体図

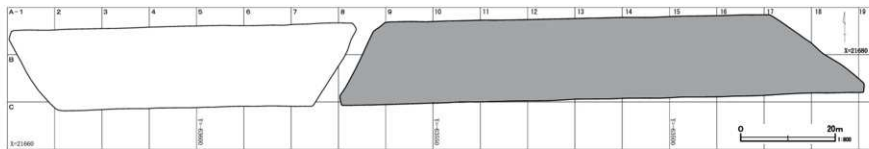




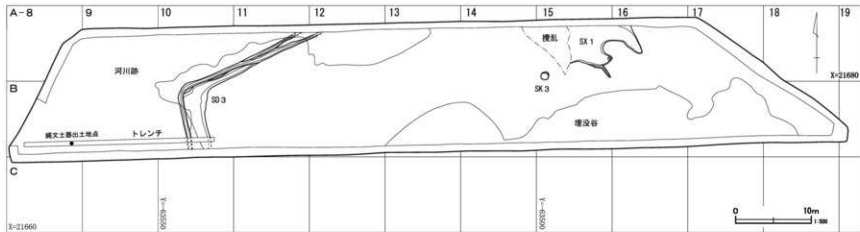
第5図 遺跡周辺の地形図

西区

東区



第6図 東区全体図





## IV 遺構と遺物

### 1. 溝跡

#### 第1号溝跡 (第8図)

西区西端近くのA・B・C-2グリッドに位置する。調査区を南から北へ横断するように直線的に検出された。

検出された長さは直線で17.8m、幅0.72~1.32m、遺構確認面からの深さは0.16~0.27mである。底面の標高は北端90.8m、中央付近90.9m、南端91.0mで、南から北へ向かって低くなる。覆土上層(第3層)に浅間B軽石が含まれていた。

遺物は、器種の判別がつかない土師器小片が5片出土した。

#### 第2号溝跡 (第9図)

西区中央付近のA・B-5グリッドに位置する。調査区を南から北へ横断するようにやや弧を描くように検出された。

検出された長さは直線で17.2m、幅0.62~1.04m、遺構確認面からの深さは0.18~0.25mである。底面の標高は北端90.74m、中央付近90.77m、南端90.80mで、南から北へ向かって低くなるが比高差はごく僅かである。覆土上層(第3層)に浅間B軽石が含まれていた。

遺物は、器種の判別がつかない土師器小片が5片

出土し、何れも磨耗が激しかった。

#### 第3号溝跡 (第10図)

東区西半のA-10・11、B-10グリッドに位置する。時期の異なる2条の溝跡がほぼ重なった状態で検出された。調査区南壁から北上し、調査区の幅の中央付近で東向きに直角に屈曲して北壁に達する。

2条のうち新しい3a溝跡は、北壁で表土(現耕作土)下約0.25mから掘削されていた。南壁から7.85m北上し、屈曲して21.28m東走して北壁に達する。幅は0.38m~0.67mで全体的に細く、遺構確認面からの深さは0.09m~0.29mである。底面の標高は北端90.33m、屈曲付近90.29m、南端90.28mで比高差は少ない。

3a溝跡より以前に掘削された3b溝跡は、北壁側で表土(現耕作土)下約0.4mから掘削されていた。南壁から7.50m北上し、屈曲して18.09m東走して北壁に達する。幅は0.30m~3.15mで、南側は広く、北に向かうほど狭くなっていた。遺構確認面からの深さは0.13m~0.31mである。底面の標高は北端90.36m、屈曲付近90.34m、南端90.38mで比高差は3a溝跡より少ない。

両溝跡共に遺物は出土しなかった。

### 2. 土坑

#### 第1号土坑 (第11図)

西区A-2・3、B-2グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.25m、短軸0.60mで北側に段を持っている。遺構確認面からの深さは0.44~0.88mである。主軸方位はN-6°-Wを指す。

底面は平坦だが、北側に向かって僅かに高くなり、段へ続く。壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。

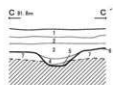
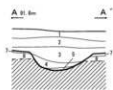
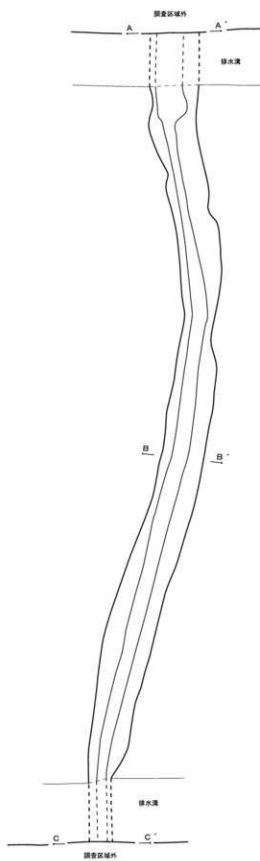
遺物は出土しなかった。

#### 第2号土坑 (第11図)

西区中央のA-4グリッドに位置する。平面形は円形に近く、直径1.02m、遺構確認面からの深さは0.45mである。

底面は平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土は単一層で、明黄褐色土ブロックを多量に含んでおり、埋め戻された可能性がある。

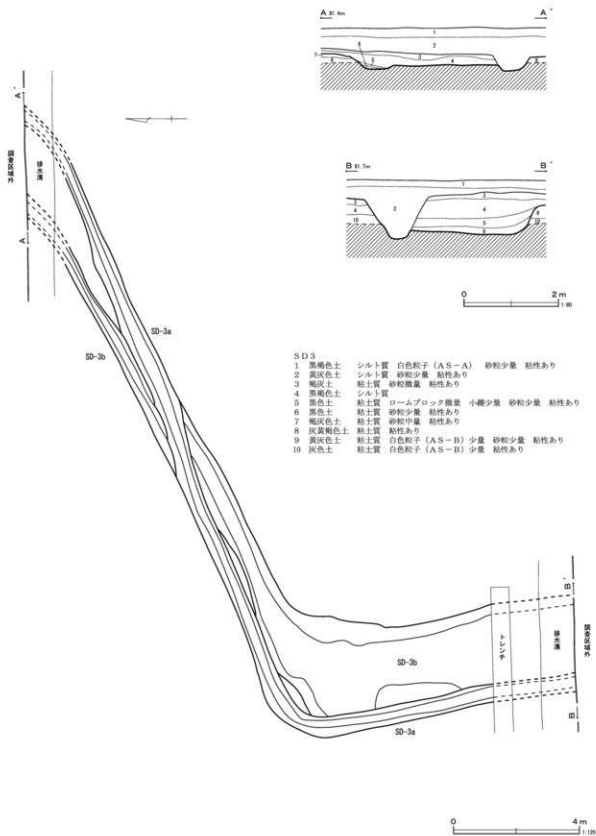




- SD2
- 1 黒褐色土 シルト質 砂粒・白色粒子 (A S-A)
  - 2 黒褐色土 シルト質 炭酸鈣 白色粒子 (A S-A)
  - 3 黒褐色土 シルト質 明黄褐色粘土微量 白色粒子 (A S-B) 粘性あり
  - 4 黒色土 棕色粒子 白色粒子少量 粘性あり
  - 5 灰色砂利 小礫多量
  - 6 黒褐色土 シルト質 小砂利少量 粘性あり
  - 7 黒色土 シルト質 砂粒少量 明黄褐色粘土・礫灰 黄色粘土微量 粘性あり
  - 8 黒褐色土 シルト質 粘性あり



第9図 第2号溝跡



第10図 第3号溝跡

### 第3号土坑 (第11図)

東区東半のA-15グリッドに位置する。平面形は東西に僅かに長い円形で、長軸0.99m、短軸0.91mで北側に浅い段を持っている。遺構確認面からの深さは0.14~0.29mである。

底面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。木製の底板と桶側の最下部が残存していた。桶内部には壊れた桶側の破片が検出された。底板の下の土層は1層で桶を据え置き際に埋められた可能性も考えられる。

遺物は、種類の判別が出来ないほどの土器極小片

が1片出土した。

### 第4号土坑 (第11図)

西区西半のA・B-3グリッドに位置する。発掘時は井戸跡と考えたが、井戸跡としては深さが浅いため整理時に土坑とした。平面形はやや歪んだ楕円形で、長軸1.62m、短軸1.15m、遺構確認面からの深さは1.21mである。

底面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がるが、南壁は垂直に近い。

遺物は出土しなかった。

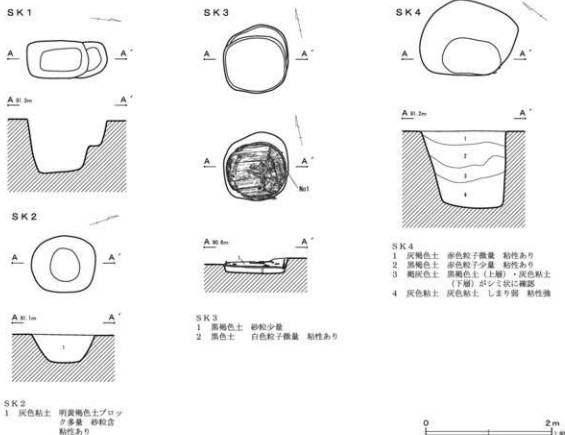
## 3. 性格不明遺構

### 第1号性格不明遺構 (第12図)

東区A-15・16グリッドに位置する。北側は調査区域外にあり、西側は攪乱で壊される。検出された平面形は不整形形で、東端は南に大きく飛び出し、

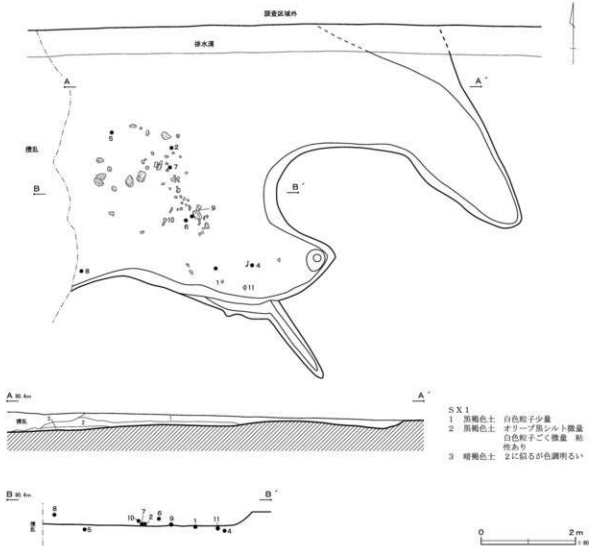
南端には溝状の突出部が見られる。東西8.9m、南北5.8m、遺構確認面からの深さは0.14~0.31mである。

底面は緩やかな起伏が見られ、東端の飛び出し部



第11図 土坑





第12図 第1号性格不明遺構

は徐々に浅くなっていた。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれるが、何れも白色粒子を僅かに含んでいた。

遺物は陶器、かわらけ、焙烙等のほか溶解炉の炉壁、木片、川原石が出土した。

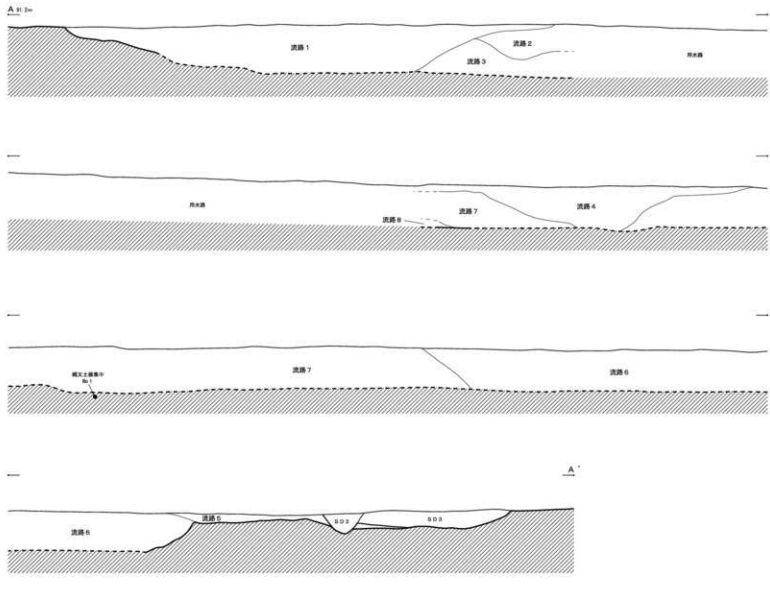
#### 4. 河川跡 (第13図)

調査区全体のほぼ中央、西区から東区にかけてのA-6グリッドからA-11グリッドの間に調査区を横断する形で河川跡が検出された(第4図)。検出された幅は最大76.4m、最小28.6mで、北壁際が急激に広がっている。

西区と東区の間は用水路確保のために調査できなかった箇所があり、この用水路を挟んで両側にトレンチを設定した。トレンチは深さ0.6~0.8mまで

掘り下げたが、湧水が激しくポンプで強制排水をしながら掘削を行った。土層観察では、大半は礫層または砂利層で、数条の流れが認められた。なお、第13図はトレンチ北面の断面図である。

遺物は土師器小片が少量出土した。また、東区のトレンチの遺構確認面からの深さ約0.8mの砂利層から縄文時代中期後葉の加曾利E式の土器が出土した(第6図・第13図・第16図1)。器面の遺存状



第 13 图 河川断面

況は不良で摩滅している。底部から口縁部へ直線的に推移する形態の深鉢形土器である。全体10%程度の残存率である。口縁部には渦巻文、楕円区画文

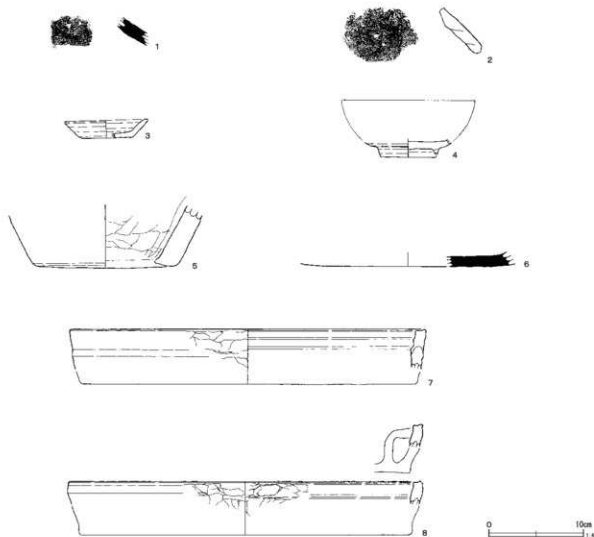
を4単位に配す。胴部には懸垂文を施す。2条の隆帯、蛇行沈線が垂下する。縄文は単節RLを施す。

## 5. グリッド出土遺物 (第17図)

調査区の遺構確認面からは縄文土器や須恵器と思われる土器が出土したが何れも極小片で図示できるものはない。

第17図1はA-15グリッド内の攪乱から出土した打製石斧である。残存する長さ9.0cm・幅7.2cm・

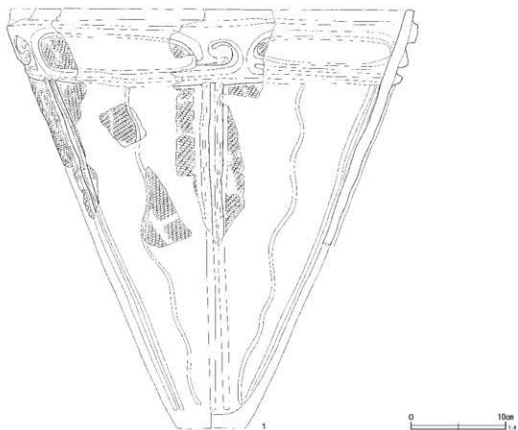
厚さ1.6cm・重さ114.2gで、石材は緑泥片岩である。上部を欠損しているため形状は不明である。両側縁部にやや細かい加工がみられるが、刃部を含め全体が粗雑な作りとなっている。



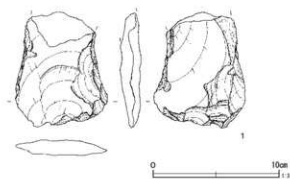
第14図 第1号性格不明遺構出土遺物(1)



第15図 第1号性格不明遺構出土遺物(2)



第16図 河川跡出土遺物



第17図 グリッド出土遺物

第1表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表 (第14・15図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土・石材	残存 (%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	須恵器	甕	—	—	—	E-I		良好	外:灰白 内:灰	Na13	自然軸	4-1
2	常滑	甕	—	—	—	B-E-I		良好	内:褐灰	Na9	13世紀	4-1
3	かわらけ	灯明皿	(8.4)	1.9	(5.0)	A-E-H-I	20	良好	にぶい體	Na4	割れ口に油?	4-1
4	陶器	碗	—	(1.6)	(5.8)	K	50	良好	灰白	Na8	灰釉茶箱軸塗り分け甕	4-1
5	瓦質	甕	—	(6.3)	(15.4)	A-B-E-H	20	良好	黒褐	Na2		4-1
6	須恵器	鉢	—	(1.5)	(25.0)	B-E-I	5	良好	褐灰	Na1	未野産	4-1
7	瓦質	内耳・焙烙	(37.2)	(5.7)	(35.4)	C-E-H-I	5	良好	黒	Na3	18世紀	4-1
8	瓦質	内耳・焙烙	(37.0)	(5.6)	(35.0)	A-C-E-H-I	5	良好	黒	Na5	18世紀	4-1
9	溶解部・伊壁		長径:6.9cm	短径:6.1cm	厚:2.4cm	重:63.6g				Na12	砂質粘土	4-1
10	溶解部・伊壁		長径:6.2cm	短径:5.7cm	厚:3.9cm	重:84.3g				Na11	砂質粘土	4-1
11	溶解部・伊壁		長径:8.6cm	短径:6.8cm	厚:2.6cm	重:106.8g				Na14	砂質粘土	4-1

## V 調査のまとめ

今回の発掘調査は、甲中ノ堰地区での古代条里型地割に関連する遺構、遺物が期待されたが、水田跡、大溝等は検出されず、平安時代以前の溝跡が検出されたにとどまる。以下では主な遺物と遺構について若干のまとめを行うことにする。

出土遺物のうち図示できたものは縄文土器、石斧、中・近世の遺物である。

河川跡から加曽利E式深鉢が出土した。縄文土器は、中期から後期に亘っており、出土範囲はA-11~12、B-10~14グリッドで河川跡の東側に偏っている。その他8~9世紀代の薄甕破片、常滑甕小片等が出土している。

土層断面では、縄文中期以降中世まで少なくとも8回の流路変更があったと判断される。近・現代の溝跡と見られる第3号溝跡が東岸に沿って検出されている点、調査区中央部の用水路にほぼ重なっている点から下限が該期まで降る可能性がある。

第1号性格不明遺構からは、中・近世の遺物が出土した。第14図2は常滑大甕破片。4は瀬戸美濃系の灰釉茶柿釉塗り分け碗でやや大形で、体部の立ち上がりから或いはやや浅いものになる可能性もある。18世紀後半か。図示できなかったが肥前染付磁器小碗、端反碗がA-14グリッドで出土し、位置的に本遺構に伴うものと考えられる。東大編年(堀内1997)のV~VI期に当り、18世紀後半以降と考えられる。

内耳・焙烙は、内面に明瞭な段を持ち、内耳部分が口唇部直下から貼り付けられ底部に接するとみられ体部は浅い。内耳土器は将監塚、深谷市居立遺跡で良好な一括遺物が出土しており、前出の磁器と同じ年代が与えられる。

その他埴壁が出土したが、隣接する第3号土坑からも小片が出土しており、この土坑も含めて本遺構を構成していたと考えられる。金屋地区は、金屋鋳物師の本拠地とされ、上一ノ堰遺跡では16世紀代

のタタラ基部と推定される遺構が検出されている。年代的に降るが、本遺構は金屋鋳物師と関連するものと考えておきたい。

他の土坑も遺物は出土していないが、主に近世以降と考えられる。

第1、2号溝跡は、埋土上層の浅間B軽石の存在から平安時代以前と考えられる。図示できなかったが、第1号溝跡からは平安末前後の坏底部片が、第2号溝跡からは8世紀代の环形土器片が出土している。何れも小破片で、第2号溝跡では縄文土器が出土しているため確実ではないが、第2号→第1号の順で掘削されたと判断される。2条の溝は、走行方向がほぼ南北となっており、条里に伴う坪内部の溝の可能性が強い。

また河川跡との関係は、薄甕胴部片が出土している点と、第2号溝跡がほぼ西岸沿に走行している点から、第1号溝跡との前後は不明であるが、8世紀代に河川流路となった後、平安末には復旧が行われ、流路に沿って第2号溝跡が掘削された。流路跡からは13世紀代の常滑甕片が出土しているが、以後正方位区画が復旧された痕跡はない。以上によると、少なくとも平安末での河川利用が考えられるところである。金屋地区では田端大溝、金屋大溝の存在が想定されているが、金屋大溝は10世紀代に廃絶され、その後「自然」的水系への直接的依存という形式の灌溉形態へ移行したとされるが、本遺跡例はこれに対応するものと思われる。また大溝廃絶後洪水の頻発が指摘されている(鈴木1996)。本遺跡周辺部は、赤根川の流路変更に伴い用水が集中する地区で、検出された流路跡も洪水の痕跡を示すものと思われ、大略調査区幅で坪区画の乱れが南北に認められるのも、洪水に一因があったと思われる。

今後調査例が増すことによって、旧河川跡の流路が復元され、大溝や引水路、坪区画と水田跡等の具体的関係について解明されることが期待される。

## 引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸—古墳・歴史時代Ⅱ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸—古墳・歴史時代Ⅰ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 岩瀬謙 1995 『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集
- 岩瀬謙 1998 『地神/塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集
- 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集
- 恋河内昭彦 1990 『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
- 恋河内昭彦 1991 『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 恋河内昭彦 2003 『金屋西遺跡（A・B地点の調査）』児玉町遺跡調査会報告書第13集
- 恋河内昭彦 2006 『金屋下別所遺跡B地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 児玉町教育委員会児玉町史編さん委員会 1993 『児玉町史自然編』
- 篠崎潔 1990 『皂樹原・楡下遺跡Ⅱ奈良・平安時代編1』皂樹原・楡下遺跡調査会報告書第2集
- 篠崎潔 1991 『皂樹原・楡下遺跡Ⅲ奈良・平安時代編2』皂樹原・楡下遺跡調査会報告書第3集
- 篠崎潔 1992 『皂樹原・楡下遺跡Ⅳ奈良・平安時代編3』皂樹原・楡下遺跡調査会報告書第4集
- 篠崎潔 1999 『中原・金屋・久保宿・観音院南・光権寺・北原遺跡・大蔵塚』神川町教育委員会文化財調査報告第18集
- 鈴木徳雄他 1980 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- 鈴木徳雄 1985 『古代児玉郡における山野の問題』『橋ノ入遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第5集
- 鈴木徳雄 1986 『縄文中期の集落用益園と生態的居住型』『橋ノ入遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第6集
- 鈴木徳雄 1990 『古代児玉郡の開発と真下大溝』『真下境東遺跡』児玉町文化財調査報告書第9集
- 鈴木徳雄 1991 『塩谷氏館跡と児玉党の形成』『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 鈴木徳雄 1996 『金屋条里周辺の灌漑と開発』『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第21集
- 鈴木徳雄 1997 a 『古代児玉郡の灌漑と地域圏』『金佐奈C・児玉条里上田地区』児玉町文化財調査報告書第25集
- 鈴木徳雄 1997 b 『児玉郡における縄紋集落の占拠と居住形態』『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第26集
- 菅谷浩之・駒宮史朗 1973 『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集
- 外尾常人 1989 『大御堂油免・不二塚前遺跡』
- 田村誠・金子彰男・篠崎潔 1995 『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』神川町教育委員会文化財調査報告第12集
- 利根川章彦 1981 『倉林後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第3集
- 利根川章彦 1998 『御林下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第223集
- 富田和夫他 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 堀内秀樹 1997 『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室

## 写真図版





1 金屋朱里遺跡遠景



2 金屋朱里遺跡全景



1 东区全景



2 西区全景



1 第1号溝跡



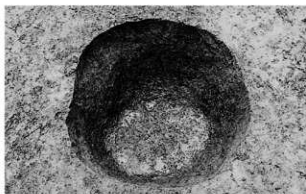
2 第2号溝跡



3 第3号溝跡



4 第1号土坑



5 第2号土坑



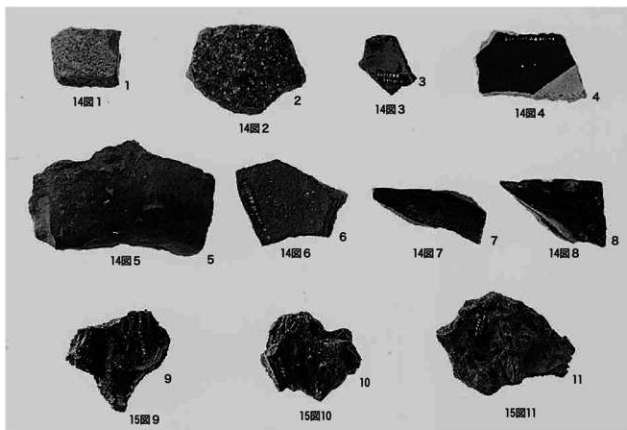
6 第3号土坑確認狀況



7 第3号土坑桶検出狀況



8 第1号性格不明遺構遺物出土狀況



1 第1号性格不明遺構出土遺物



2 河川跡出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな		かなやじょうりいせき						
書名		金屋条里遺跡						
副書名		県道秩父見玉線（本庄市地内金屋条里遺跡）建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号		第331集						
編著者名		磯崎 一						
編集機関		財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地		〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1 TEL0493-39-3955						
発行年月日		西暦2007（平成19）年2月26日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯*	東経*	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かなやじょうりいせき 金屋条里遺跡 こうなかのせまらく 甲中ノ堰地区	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 こだまちょうかなや 見玉町金屋1306-1 ほか 他	11382	120	36° 11′ 47″	139° 07′ 26″	20030722～ 20031031	3,200	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金屋条里遺跡 甲中ノ堰地区	条里跡	平安時代 中・近世	溝 跡	2 条	縄文土器・石器			
			溝 跡	1 条	土師器・須恵器			
			土 坑	4 基	陶磁器・炉壁			
			性格不明遺構	1 基				
			河川跡	1 箇所				

\*北緯・東経は、世界測地系で表記した。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第331集

---

本 庄 市

---

## 金屋条里遺跡

---

県道秩父児玉線建設事業関係

埋蔵文化財（本庄市地内金屋条里遺跡）発掘調査報告

平成19年2月20日 印刷

平成19年2月26日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1  
電話 0493(39)3955  
<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／誠美堂印刷株式会社